

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 「新しい日本語」と日本語教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2042">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2042</a>

# 「新しい日本語」と日本語教育

阪田 雪子

「新しい時代に応じた国語施策の在り方について」の諮問を受けた第20期の国語審議会（平成5年11月）の課題は、「言葉遣いに関すること」、「情報化への対応に関すること」および「国際社会への対応に関すること」であった。国語審議会がこのような問題について諮問を受けたのは、その60年に及ぶ歴史の中ではじめてのことであるという。最近では新聞や雑誌などにおいても、敬語をはじめ言葉遣い・漢字の使用などが「新しい日本語」の問題として取り上げられることが多い。また、内外における日本語学習者数の増加や学習目的の多様化に対応すべき日本語教育の在り方についても多くの課題をかかえることとなった。

もはや従来のように、規範にのっとり「日本語の乱れ」として問題にするだけでは済まされなくなってきている。敬語の使い方についても、例えば、尊敬語・謙譲語を正しく使い分けなければならないというだけでなく、コミュニケーションを円滑にするという観点が重視されてきている。日本語教育においても、日常の会話では「きょう 授業 ある？」というのが普通であるから、「きょう 授業 がありますか。」というモデルを学習者に強制しているのは当を得ないという意見もある。しかし、コミュニケーションの場面で目上の人にも失礼にならない表現をまず学ばせるという点を配慮すれば、最初は助詞を省かない「です・ます」の丁寧体の会話を指導することが必要である。要は、多様な学習目的に応じて考えるべき問題なのである。

戦後、日本語教育が再開され教材の制作が始まったのは昭和20年代後半であるが、当時の国語審議会が建議した「これからの敬語」（昭和27年）が大きなよりどころとなった。「これからの敬語」では、「すべて社会人としては相互に対等のことばづかいをするという大原則をうちたてることが必要」であり、「です・ますの敬語体で受け答えするという心がけがたいせつ」だとしている。中でもそれまで標準語としては認められなかった「大きいです」「小さいです」という丁寧形が自由に使えるようになったことは、日本語教育にとって画期的であった。しかしこの時は、過去形については将来のこととして先送りにされたのである。戦後、最も早く制作された日本語の教科書「NIHONGO NO HANASHIKATA」（国際学会編 昭和29年）では、「暑いですが／暑かったです」に加え、「暑くないです／暑くなかったです」の形も入れている。「です」を除けば、そのまま普通体として使用できることを考慮したものである。「暑くありません／暑くありませんでした」が標準的な形であったから、一部の人には奇異に聞こえたようであるが、現在では、「暑かったです」はもちろんのこと「暑くないです／暑くなかったです」も一般化している。これにつられてか最近、口頭語では「そんなこと知りませんよ／知りませんでしたね」が「知らないですよ／知らなかったですね」という言い方でするようになってきている。

言葉は時代とともに変化していくものであるから、あまり規制を加えず自然の変化にまかせようという考え方もあるが、やはりいろいろな面での調査・研究の成果を踏まえた上で、教育のよりどころとなる、また、国際化の時代にも耐えうるような日本語のあるべき姿や方向性が示されることが望ましい。